

# うきたむ

第28号

2007.2.1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL0238-52-2585

FAX0238-52-4665



▲南陽市梨郷神社 大日板碑（左端）正元元年（1259年）

近世遺跡の調査から

## 「板碑」雑感

考古資料館 館長代理

井田 秀和

近年、近世・近代遺跡の調査を手がける機会があり、当時の庶民生活の一端を見ることができ、貴重な経験であった。近世・近代の遺跡は、家屋の立替や井戸や水路、貯蔵穴、廃棄土坑などの付帯施設の整備のために掘削や盛土が繰り返され行われたためか、それぞれの遺構が重層的に発見される。そのため、想像以上に複雑で、古代以前の遺跡などではあまり見ることができないような様相を呈する。出土する遺物も、陶磁器片をはじめとして木・金属・石・ガラスなどの諸製品、果てはプラスチックの類まで極めて雑多である。遺物の出土の仕方でもまた特徴的で、住居域では遺物が極端に少なく、むしろ盛土整地層内や居住空間の外側にそこかしこ掘られた「穴」、水路内などに多量の遺物が含まれていた。かつては用水路として重要な役割を果たしたであろう水路に、かくも多くのモノが捨て去られたことは一つの驚きであったが、本来供養のために建てられた「板碑」が、水路の護岸や井戸の構築材として用いられていたこともまた意外なことであった。

板碑は、十三世紀前葉頃から十七世紀初頭頃まで造立された石塔の一形式で、全国各地に見ることができ、その特異な形態から、一見してそれとわかるものが多く、識別も比較的容易であるが、その形態は地方によりそれぞれ異なる特色を持っている。本県内でも、成生型、置賜型、最上型、飽海型などのいくつかの形態が見られる。造立の目的は、親の供養や自身の後生供養のためであり、所謂「供養塔」と考えるのが一般的である。前述した板碑は、十八世紀に構築され十九世紀前葉頃に廃絶したと考えられる井戸の石積に数基の板碑が用いられていたもので、中には、碑面に石皿のような磨面の痕跡が残るものも見られた。注目すべきは、使用された石造物が板碑だけである点である。この頃にはすでに、人々の生活とは乖離したモノであったのである。もちろん、板碑の転用例はこれにとどまらない。水田の水路や小川の石橋として利用される例は少なくない。板碑が、供養を旨とした石塔から単なる石へと変貌してしまうのは何故なのか。そして、それは何時頃なのか。井戸を築いた人々の目には、板碑というものがどのように映っていたのか、是非知りたいところである。

# やまがた文化の黎明と地球大温暖化

第十四回企画展「旧石器から日向へー大きく変わった環境と文化ー」が十月一日より十一月三十日まで開催されました。県内では大変数多くの後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡がありますが、やまがた文化の黎明期にあたると共に地球大温暖化の時代にあたり、やまがたに住み始めた祖先が地球大温暖化を乗り越えていく様子を文化面から展示しました。古くて新しい主要資料とあって、県内外から大勢の見学者が訪れました。

## 豊富な主要資料

展示構成は常設展示も活かし、

「氷河期のやまがた」「やまがたの最古の文化を求めて」「最寒冷期のやまがた」「大温暖化のはじまりー日向洞窟のころー」「大谷地を囲む遺跡群」

の五部構成で、三万年前から一万年前の石器をはじめ土器・自然遺物などの資料を展示しました。

後期旧石器時代の石器資料は、県内に数多く存在するものの常時展示されているものは少なく、この度代表的なものを一堂の下に分かり易く展示したことにより、やまがたの後期旧石器時代の文化がよく捉えられ、考古ファンにとっては大変な魅力となったようでした。

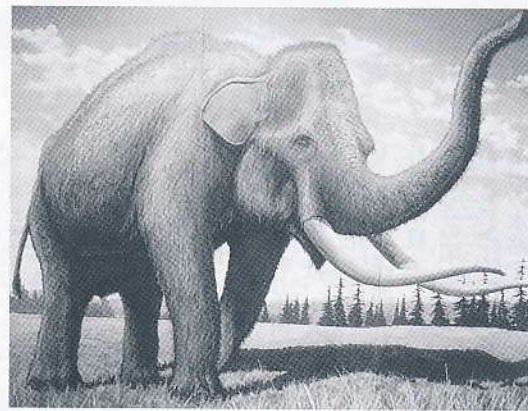
また、縄文時代草創期資料も同様で、近年の資料である酒田市八森遺跡や日向洞窟西地区の石器、五十年近く前の日向洞窟出土の土器も大変興味深かったようでした。

この度の展示は単なる文化資料の展示でなく、常に当時の環境がわかるように解説され、環境変化と文化の変遷が捉えられるようになっていたことは、地球温暖化の最中に生きる見学者にとって身近さがあって好評でした。

## 工夫された展示

約五十年に及ぶ研究史を生きたきと展示したり、等身大のナウマン象はじめ後期旧石器時代から縄文時代草創期の動物達の復元画を随所に添えたり、石器の使用法を複製品や写真で解説したりして、考古学の素人でも惹きつけるように工夫されて、見学者にとって分かり易かったようでした。さらに隆起線文土器の復元品や日向洞窟出土の縄文犬の

復元資料も見学者を魅了して  
いました。



▲等身大ナウマンゾウ復元想像画（棚沢 寛作）

## 積極的な解説

本館で課題となっている音響サービスは、未だに克服できていません。それを踏まえて、希望者には随時解説を行いました。解説の良さは見学者に心じた説明ができること、対話しながら説明できること、肉声であることなどですが、積極的に行いました。多くの見学者に喜ばれました。対応に忙殺されながらも満足感に浸ることができました。

## 連携事業との相乗効果

七月から八月に開催した考古学セミナーも「山形の旧石器・中石器時代」のテーマの下、五講座実施しましたが、受講者の方々がほとんど見学して下さいました。八月には、東北学院大学佐川正敏教授による「日向洞窟が語る環境と文化の大激変」の演題で記念講演が開催されましたが、その受講者も大勢見学して下さいました。

一部の大学では大勢の見学者を引き連れ、授業の一環として見学をして下さいました。

十一月二十五・二十六日には、東北日本の旧石器文化を語る会のシンポジウムが高島町で開催され百五十人ほど参加されました。その関係資料が展示されるとあって、参加者の方々が見学を訪れ、閉館時間を延長するほどの賑わいでした。正に相乗効果でした。



▲企画展の様子

新庄・鮭川方面の

歴史遺産を堪能

本館の事業は大半が館内で実施されますが、遺跡見学会講座は野外に行います。春と秋の遺跡めぐりは、考古ファンにとって大変楽しみな事業となっています。

春の遺跡めぐりは、六月四日に南陽市内の遺跡を探訪しました。熊野大社を初め宮沢城跡や板碑などを見学し、大変好評でした。

この度は十月二十二日に行いま



▲庭月観音堂

した秋の遺跡めぐりの様子を紹介します。

山形県北東部の最上地域、その中核をなす新庄市を中心に最上地域の歴史・文化を訪ねました。講師は最上地域の考古学研究者で、本館の考古学セミナーの講師でもある長澤正機先生で、普段の歴史散歩ではなかなか歩けない所も含めて丁寧にご案内いただきました。

最初の見学地は舟形町の西ノ前遺跡。日本最大の土偶「縄文のヴィーナス」が出土した遺跡です。標柱と説明板のみですが、地形も分かり雰囲気がかう遺跡でした。次に鮭川村庭月観音、最上三十三観音最後の札所を見学しました。観音堂も風格が漂い素晴らしいのですが、裏手に縄文の配石遺構も保存されていました。続いて鮭川村中央公民館で、縄文の複

▲庭月観音堂遺跡配石遺構



式炉が見事に復元されているのを見学しました。

新庄市に入り、昼食後、ふるさと歴史センターで、旧石器の宝庫といわれるだけあって素晴らしい旧石器資料などの考古資料・県内トップクラスの収集を誇る民俗資料などを見学し、新庄藩戸沢家墓所へ。調査時のお話を伺い、とても充実した見学となりました。次に旧矢作家住宅、鳥越八幡神社を見学しました。今回は長澤先生の解説があり、普通の見学では味わえない遺跡巡りとなり、充実感溢れるものとなりました。

楽しくチャレンジした

ガラス玉づくり

今年で三年目を迎えた「ガラス玉づくり」体験学習。年々好評で、今年度は大勢の方に申込みをいただきました。

ガラス玉は、弥生時代から装飾品や権威の象徴として用いられてきました。古墳時代後期の山形市お花山古墳出土のものを当館常設展示で展示しております。青い色で、見学者を魅了しています。

ガラス玉づくり体験では、古代以来の巻き付け技法を用います。ガラスを溶かし心棒



▲親子でガラス玉づくりに挑戦！



▲完成した手作りガラス玉

に巻き付けてガラス玉をつくります。古代人と同じ技法を用いることにより考古学に親しんで貰えます。

参加者の中には、親子で参加した方々もいて、楽しく挑戦していました。

当館の体験学習では、親子で参加される方も多数おり、様々な光景がみられます。お子さんの完成に集中されるばかりでなく、自らも熱中して、「はまってしまいました」とこぼす方も。

積石塚風の終末期古墳

# 鼠持古墳

米沢盆地の北部から東部にかけて盆地周縁の丘陵地に分布する小型横穴式石室を持つ小さな円墳は、七世紀から八世紀にかけて造営された終末期古墳です。

和田地区にあります。当該地区に集落を構えた豪族が、北側の文殊山麓に造営したものとみられます。鼠持集落の横から細い山道に入り、北に進むと左手に見えます。

昭和三十一年八月に高島町教育委員会が調査を行いました。

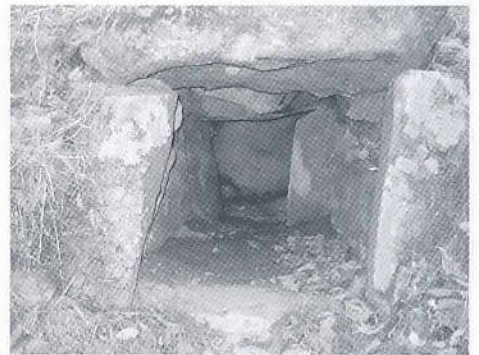
持古墳は、高島町元和田に所在します。置賜の終末期古墳分布の中心地である高島町高島地区の南に聳える文殊山の南、



▲近景（南東より）

外側には周溝が回っていることが確認されています。内部には南に開口する横穴式石室が比較的良好な状態で残っています。石室の玄室と南に続く羨道の残存部分の長さは三・六mあり、玄室は幅二・二m、奥行き一・六mと平面形が長方形です。大変狭く、置賜の終末期古墳の中でも小さいです。奥壁は一枚石をもって構築され、東西の側壁は基底

部に安定のある巨石を用いその上部に小形の石を積み上げています。一枚石の天井石までの高さは一m〜一・二mで、これまた低い。羨道部の高さは〇・八mで石室より低くなっています。



▲開口部からみた石室の様子

出土品は、発見された当時から開口していたため、すでに持ち去られた副葬品もあると思われるですが、石室床面には夥しい骨片と若干の鉄製品が確認されています。

本古墳の特徴は、多くの古墳が石材を凝灰岩としているのに石英粗面岩を用いていること、石室が狭いこと、積石塚の様相が強いことなどで、昭和五十四年に町史跡に指定されています。

高島町北部の大谷地に面した屋代地区日向。今見ても縄文人の住み着きそうな所ですが、ここに全国的にも有名な日向洞窟遺跡があります。最初に人類の痕跡を遺したのは、一万二千年前の縄文時代草創期のことです。本年度の企画展「旧石器から日向へ―大きく変わった環境と文化―」の主役となった遺跡です。

五十年ほど前から数次に及んだ発掘調査の結果、隆起線文土器を初めとする土器や石器が得られ、縄文時代のはじまりを上げる遺跡として国指定史跡にもなっています。

この日向洞窟遺跡から出土したにも関わらず、なかなか日の目が当たらなかつたのが自然遺物です。今次企画展を機会に、奈良文化財研究所に分析していただき、展示されました。

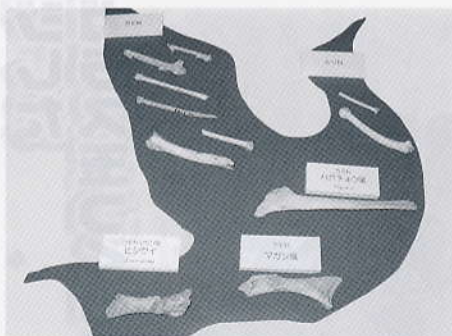
ツキノワグマやイノシシ、ノウサギ等の獣骨、カモやハ

我が館の展示品⑱

## 高島町日向洞窟遺跡の自然遺物

クチヨウ等の鳥骨などがありました。イヌには「日向犬アキラ」の名前も公募でいただき、復元画もできました。企画展時には大勢の来館者に注目されました。

さらに分析を進め、日向縄文人とこれらの動物との関わりを明らかにしたいものです。地球大温暖化の中で登場したこれらの動物の化石骨は、大事な歴史を明らかにする上で貴重です。



▲日向洞窟出土獣骨